

燐は雪男が拾った話をつつかえながら読んだり、不思議に思っただいっつかの話を話した、もはや百物語とは名ばかりの与太話でしかない。しかし幽霊列車ならぬ、幽霊踏切フシトムドレシヤナ、最期の風景を見せるバス、怪談奇談と呼ばれるものは思う以上に多く、雪男の話を含めて百話も届かない、燐はうーんと腕を組み、何となく気になってるんだけど、話した。

「先週の金曜、ビルの配管とこから魍魎がどつと出ただろ？」

「うん」

正十字騎士團が調べたところ溜まった汚水が原因だったのだが、処理を怠った企業側のミスだ。配管の腐敗ぶりから見ても、どきどきさのようにして不要品を詰め込んで薬品を流したとしか思えない、十年を掛けて腐らせ、魍魎と、瘴気バクテリアとを繁殖させたのだ。オーナーもおらず、会社自体はすでに倒産しているため責任を追及できない。下水道は繋がっている、聖水で広範囲で処理をした。

「任務に呼び出されたとき、オレ、帰ってる途中でよ」

「…遅いね」

非難するでもなく言う、燐は言いつつ子猫丸が調べることがあるつつーから、と付け足した。

「坂の途中に工事してるとこ、あんだろ？」

雪男は頷く。地盤強化のためだったと思う。何かを入れるのだと通知が回ってきたのは三ヶ月くらい前のことだ、通知の早さにしたら実施も遅く、発掘調査だかもあるので工期もだらだらと長い。工事は人柱代わりに眠っている吸血鬼を埋めでもしようとしているのかと思えるほどの慎重さと丁寧さで肅々と行われていた。別に工事担当者が怠慢であるとか不満があるでもないのだが、住まいから近いだけに誰かが何か企んで

いるのではないのかとつい考えてしまったことは燐にも言っていない。

「レインコートを着た女が、穴の中を覗いてた」

「落とし物？」

燐は、雪男に目を向けやりにくそうに腕を撫でると、だとしたらわざと落としたんだと思う、と続けた。

「前の日から雨が降って、あがったの屋過ぎだったから工事はしてない。だけどあそこ工事ねえと穴の回り囲んで、ブルーシートかけてただろ？」

「……」そういえば。

絶対に安全でない地下に繋がるマンホールなどは落下のおそれなどの危険があり、夜は覆い隠すか、蓋をする。塞がらない穴があるとすれば絶えず作業が続けられているか、護符やら魔除けの草を添えられ、煌々とした明かりに照らされていた。単純な穴だけど異世界とのドアにされかねない場所だと獅郎に教えられてもいた。町には水路が巡らされ、物流の一端を担っている、水は流れが繋がっている。巨大な下水道処理施設は地下に、強力な境界と置いてあるのだ。

「困っていると、そういう風にも見えなくて、穴だなあっていう感じで見えた」

「それは…もしくは工場とか好きな類いの子では…」

「かも知んね」

雪男の指摘に燐は素直に認める。

「だって、任務が終わってオレが帰るときまで居たんだぜ？」

雪男はえっと短い声を出した。

「暗くなっても？」

「うん。まあ、回りはずつとちかちかしてんじゃん。看板も光るし」
「でもここらへん、人通りはおろか交通量だって多くないじゃない、心細いよ。光だって届くかどうか…」

好きも度を超えているのではないか。しかし、廢坑マニアとか寂しい場所を往年の時代を思い浮かべつつ愛好するひとはいて、小さな傷跡一つも愛しげに目で撫でる。工事穴ひとつ、変だとか言ってしまったら失礼とそこは弁えている。雪男には理解しきれないというだけだ。

「そいつ、同じ学校」

「え？」

「雪男のことを、黒い」って」

燐は軽く固まつてしまった雪男を気にするでもなくちよつと変わつてくる感じだったな、と思い出すように視線を雪男と蠟燭の間に浮かせた。

「エキセンストックで」

『『エキセントリック』』

「ともいう」

と、燐はもういいだろう？と面倒そうに言うところぐらと身体を揺らし「眠んだよ、と訴えた。まだ二人で半分も消化してない、蠟燭は二本を消したばかりでタブレットを見れば深夜一時を過ぎていて、話は尽きた、わけでもないが飽きもしているのは雪男も確かだ。もう少し、と食いがろうとして座つたままの燐の寝息を聞く。

「兄さん」

それでも満足だったのか、残つた蠟燭が音を立ててその炎を歪めたと思つと、ふつと火は消えた。

「…あれ？」

出ない、だけど気配だけは感じた。見回したけどやはり視えない。燐の寝息とクロがばたんばたん尾を緩く床に叩きつけている音がするだけだった。背筋を伸ばして窓の外を見る。夜の色に塗りつぶされている箇所は多く、工場の赤く点滅している光が目立っていた。床を這う物音がしてはつと腰を上げそうになり、燐の尾だと気付いて恥ずかしくなる。子供の頃によく感じていたそこにある、という掴みどころのない恐怖心が四隅に転がっているのだろう。

「…何がどうしてこうなった…」

雪男は額の腫れを前髪で隠すようにしながらぼやく。

「どうも何も」と燐は弁当を差し出しながら刀袋を肩にかける。「寝惚けて柱に激突するとはこつちだつて思わねーよ」

「兄さんが朝から生氣吸い取るからだろ」

負け惜しみみたいに呟かれ、燐は腕を組んで横を見た。

「何もしてねーだろが」

こつちだつて寝足りない。朝の六時から起こされるとは燐だつて思わなかった、いや、起こしたのはクロか。ベッドでなく床に二人で同じ毛布にくるまって寝ていたところを朝のパトロール（つまりは気儘な散歩だ）に行くからとべしんべしんと互いの頬を叩いて起こし、勇敢な猫^{ネコ}又は颯爽と飛び出していった。雪男は身体が痛いとはやきはしたが、丁度いいとばかりにぼーつとしている燐にコーヒーをお願いする。燐は仕方なく早い時間から弁当などの用意をしたのだ。朝から魚を捌いて団子汁、炊き込みご飯なんかやつてしまった。寝るなど言つたそんな本人

がパソコンの前で寝こけているなんて思わない。だからして、それから
の事故は燐のせいではない。

「起きなかつたとか言つて、お前こそオレにナニ頑張つたんだよ」

「すり寄つてきたのはそつちだ」

雪男はあくまでも燐に付き合つて床に寝てやつたのだと主張する。

「んなこと言つちやつて：」

——— ヲ

「はい、奥村」

雪男は弁当を持つたまま電話を受けている。掲げたそれが敢えて燐の
目線の高さというのが憎たらしい、中断されて喚きたいところだつたが
子供っぽいのでふん、で許してやつた、燐はお優しいお兄様なのだ。涼
しい横顔を見るとまるでかわいげのないホクロが二つ並んでいたりする
わけだが。

「はい、……ええ」

受け答える表情も厳しい。雪男には全然有り難くもない話だなと見
当をつけて燐は先に歩き出した。

「フェレス卿から呼び出された」

「雪ちゃん、なんかしたの？」

「してない」するわけない、という顔だ。

雪男は任務に関しては絶対に口にしない。仕事でもあるから仕方がな
いとは思ふけれど小さい頃は話したがらだつた、読んだ本について燐は
まるで理解が追いつかないのに目をキラキラさせて説明した。それが大
きくなり、話して良いか悪いかを秤にかけてよく吟味してから話すよう
になった。燐は心を許すとすぐに話すよね、とちくりと刺す。オレにだつ

て話さないことはあるし、言わない約束だつたら守る、と反論したが雪
男は信じているのだからかわからない。

校舎に入るところで雪男とは別れた。

「……」

雪男は理事長室に向けた歩調を緩め、宙に視線を彷徨わせると燐を見
る。

「何だよ？」

「鈴の音、してない？」

燐はさあな、と自分も持っていないという風に手を広げて見せた。雪
男は納得するようにならないような顔をする。腕時計を見て颯爽と歩き出
す。理事長の呼び出しにあつては授業も何も関係ないだろう、見送つて
からエントランスに入った。

「奥村君」

子猫丸だ。今日も志摩と勝呂で三人一緒だ。

「おー。はよ」

「珍しな、兄弟で通学なんて」

「そうか？」

見えてたのか、と思う。声を掛ければいいのに。

燐が真面目に学校に通うようになったので、雪男と一緒に通学も多い
ような気がしていた。中学の時はそりやあもう行きたくない、居心地悪
い、授業わかんないからどうでもいい、の三拍子でいつも他の暇潰しを
求めていた。雪男は先に行つたり、後から追うようにして説教したりそ
んなことはかりして鬱陶しくもあつた。けど今は勉強しろ、授業をちゃ
んと聞け、僕は忙しい以外はあまり煩くない。ただ、物に關しての愛着

はある方だから雪男の所有物は本当はあまり弄ってはいけなかったりする。借りた本を大事に扱い、拾った猫や犬なんかに懸命になるのが雪男だった、見ていて息苦しくなるくらいに気持ちを傾けてやれるのだ、そういう自分を嫌がっているみたいで素知らぬ顔して隠すようになったけどなんだかんだ言って歯軋りしながらも自分を撃てないところが雪男だと思っ。

雪男はすぐに燐を撃ち抜けたのだ。

弟に殺されるのは嫌だ、そんな遣り切れないことはない。

けど、もし、炎がどうにもならなくなって自分を失ったら、雪男や祓魔塾のみんなを傷つけて損なってしまう前に逆にとどめを刺してもらえたらまだよかったよな、と思う。燐が我を抑えられなかった罰に、信頼する仲間から叱咤代わりの刃を貰うのだ。そういう思い方なら納得がいく。まだ死にたくはないけど。

「奥村君、どないしたん？ 変な顔しとるけど」

「いや、これフツの顔だから」
と、志摩が顔を出す横から、しえみが声を掛けてくる。登校したてのとき、雪男にくっついて回った校舎について迷子になりそうだと言っていた、そんなやや興奮した面持ちとは時間が経っても薄れない。毎朝、生徒の多さに緊張し、祓魔塾の面々で安心しているらしい。具合悪くもなっていないし、寝込まないところなんかほとんど大進歩なんだよ、と雪男も力説していたくらいだ。経験したことがないだけにどれだけ弱い二人なんだと過ぎるほどに強い燐は考えたりした。そういう点で二人わかり合っているのだろう、学校で雪男としえみが並ぶとなんだかほのぼのとしている。

「イヤイヤ、別に寂しいとかじゃないけどな！」

首を振る。

「燐？」

「何を判らんことぶつぶつ言うてんねや」

「それよりも、奥村君、聞いてはる？」 杜山さんも。

下駄箱には古風な手紙はない。メフィストがあんな丸い字を書くとは予想外なようなそうでないような気がしたが、妙な呼び出しはせずに、今日は雪男の方に用があるみたいだ。

「何を」

叩きつけたわけでもないけど、簀の子に落とした上履きは弾けたような小気味よい音を響かせる。

「わ。燐、すごい音だね」

「ええから話を！」 チャイム鳴りますすし。

子猫丸はやっぱりと割り込んで仕切る。

「女子寮の方で、一人行方が分からなくなっている生徒がいるそうです」

「子猫さん、情報早いな」

女子の情報を先んじられたと言いたげにやに下がった顔をして志摩が言う、正十字学園のコミュニティサイトですよ、と子猫丸は表情も変えず説明する。学校に設置してあるパソコンに学園独自のサイトがあり、生徒の学籍番号がそのままログイン番号だった。簡単な話だ、ある女生徒が門限までに戻らなかつた、ルームメイトが心配して呼びかける、目撃情報が集まったのはいいが、結局寮に戻ってないらしい。サイトにログインしていなければわからないから、きっと彼女にも呼びかけは届いていないのだろう、話は外出は実は一泊ではないか、それとも事故に巻き